

感応し合う関係性から発達は立ち上がる

遠藤利彦

第一次間主観性

人は元来、一人ひとり、相互に独立した固有の心を備えている。しかし、それは、いつも堅く閉じて在る訳ではなく、時にその外殻を瞬時にして開き、他者の心と互いに疎通し、融和しようとする。日常、多くの場合、そこには、言葉というものが介在し、何かの意味を載せて人と人との間を幾たびも行き来するのだが、行き来するのは何も言葉ばかりではないだろう。人は意識して言葉をやりとりするその傍

らで、あるいは全く言葉を向け合うことがなくとも、無意識裡に身体間で密やかな情報の交換を行っているのである。人の心は、多くの場合、知らず知らずの間に、相手の身体が発する、言葉なき種々の語りに敏く感応してしまふ。そして、その時、自らの身体もまた期せずして相手の心を感じさせ、二者の心は濃密な情意の渦の中に巻き込まれていくのである。

養育者と子ども、特に初期の母子関係は、そうした感応し合う関係性の最たるものと言えるだろう。母子は相互

に、相手側の発したふるまいや情動に、時に等質的な、時に相補的な情感を覚え、またそれと同時に何らかの身体表現（母親においては加えて言語表現）をもって応じる。その母親と子どもという二項間での精妙な情動的やりとりは、心理学の中では、時に第一次間主観性の状態とも呼ばれ、母子の緊密なアタッチメントやその後のより高次のコミュニケーションの礎になることが仮定されてきた。

ミラー・ニューロン

しかし、確かに様々な仮定はされてきたのだが、その基底に潜む機序やそれが拓く発達の機能の詳細が、実証レベルでどこまで明らかにされてきたかという点、それはきわめて初歩的な段階に止まってきたと言わざるを得ないような気がする。例えば精神分析の領域では、原初的な母子関係における、特に母親側の子どもの動作や情動に対する感応状態を、時に、映し出しや照



遠藤利彦・佐久間路子・徳田治子・野田淳子[著]
『乳幼児のこころ』
四六判，340頁，2100円（税込）

らし返し（mirroring）と呼び、母親が一種の社会的鏡の役割を果たして、子どもの内なる心的状態や生理的状态を、子どもの知覚に対して映し返すことの枢要性を殊の外、強調してきたのだと言える。子どもの種々のふるまいに対してほぼ同期的に感応し、結果的に子どもと同じような表情になり、また声の調子を発するに至った母親を、今度は、対面する子どもが見聞きする中で、子どもは自身の内側で今、何が起きつつあるかを徐々に知るようになり、そしてそれを通じて、自らの心を解し、また他者の心に共感するための心的基盤を準備するというのである。大学の講義で心理学を聞きかじり始めた頃には、こうした精神分析における言説に大いに心惹かれたものだが、果たして、その当時から今まで、それが具体的に何で、何故生じるかを精細に説明できるようになったかという点、

その進歩の遅々たることに実に忸怩たる思いにならざるを得ないのである。もっとも、最近、これぞ一条の光明かとほのかに思い始めているものがあるにはある。それは、いわゆるミラー・ニューロンというものであり（一部にただの狂騒に過ぎないという冷めた見方もあるが）、脳科学者の中には、その発見の価値を、かつての分子生物学におけるDNAの二重螺旋構造のそれに擬えてみる向きもあるようである。ミラー・ニューロンとは、ある動作や情動表出などに関わる知覚系と運動系の処理を一括的に担うという特異な性質をもった神経組織であり、これを備えていることによって、私たちは、他者の動きをダイレクトに自己の脳内に映し込み、それによって他者の心身状態のシミュレーションを瞬時に行っている可能性が想定できるのだという（他者の動作を知覚するニューロ

ンが、自身が同じ動作を起こす際のニューロンでもあるため、他者の動作の知覚によって賦活されたニューロンのふるまいが結果的に自身が同じ動作を行う際の内的状態を表現することにもなる)。いささか安易な例解かも知れないが、これが意味するところは、他人が今にも転びそうになっているという場面を見た時に、私たちの中では、自身が転びつつある時に関わってくる神経組織がそのまま活性化している可能性があり、そして、だからこそ、私たちに時には、他人がその時にきっと覚えるだろう恐れや痛みのような感覚が、すぐさま、まさに自分のものであるかのように経験され得るということである。言ってみれば、ミラー・ニューロンとは私たちの共感性を支える脳内基盤ということになる。

これから推察するに、乳児に対面した母親もまた、自らのミラー・ニュー

ロンをもって、子どもが発する種々の身体動作や情意に感応しているのであり、そして、その有様がまさに精神分析学者がかつて映し出しや照らし返しと呼んだ状態そのものであるのだろう。現に、近年の実証研究の中には、母子相互作用場面における母親のニューロ・イメージングに着目し、特にミラー・ニューロンと前補足運動野等に顕著な活性化が認められることを明らかにしているものもあるようである。そして、それは、母親が子どもに対して、一方では子どもの情動に共感・同調しつつ、他方ではそれを慰撫・調整していることを含意しているのではないかという。当然のことながら、母親は子どもの苦痛の泣きに対して、ただ情動的に巻き込まれ、自ら苦痛に顔を歪ませるだけではなく、その後すぐに、時には笑みを浮かべながら、優しく子どもをなだめ、あやすのである。

実のところ、映し出しや照らし返しといった概念においても、元来、母親が、子どもの情動と等質であって、しかし、それそのものではない（和らげられた）情動を返すことの重要性が肯定されており、こうした仮定が、ある意味、それとは全く独立の学知領域で進行してきた研究知見と、かなりの符合を見せるということに、率直な驚きを禁じ得ないところがある。

そして、さらに刮目すべきことは、ミラー・ニューロンの研究者の中には、子どものそれが、発達のプロセスの中で、まさに養育者等から、精神分析で言うところの映し出しや照らし返しを受けることによって、漸成的に成りたってくることを仮定する論者も存在しているということである。ある行為や動作に関わる特異な内部感覚的経験を有することと、他者の身体の上に、それに対応した知覚的経験を

ことが結びつき、そのある種の行為と知覚のフィードバック・ループの中で、少なくとも一部のミラー・ニューロンは次第に発達してくるのではない

かというのである。精神分析は、ある意味、母親の共感する心が、子どもの同じく共感する心を準備することを純粹に心理学的モデルとして主張してきた訳であるが、近年の脳科学は、母親の（ミラー・ニューロンという）共感する脳が、子どもの同じく共鳴する脳の発生に関わるという神経学的モデルを打ち立てつつあるとも言え、その両

者の重なりやすれの行方には、今後益々、目が離せないような気がする。

ミラー・ニューロンと自閉症

ミラー・ニューロンつながりで言えば、その欠損や特殊性が自閉症の中核的原因としてあるのではないかという議論も喧しくなってきた。ミラー・ニューロンは、今や、感性のみならず、模倣や他者の心的理解あるいは言語・非言語（身振りやジェスチャー等）のコミュニケーションなどにも深く関わっているとされているが、実

は長くそれらの障害や特異性こそが自閉症の本質的特徴とされてきたことからすれば、この主張は、ある程度、肯けるところでもあるように思われる。

しかし、もし、それをただ遺伝的あるいは器質的要因に由来する生得的な問題と単純に片付けてしまつたのであれば、その議論の方向性にはいささか違和感を覚えざるを得ない。なぜならば、先にも見たように、そもそも、ミラー・ニューロンが社会的鏡としての養育者との相互作用の中で立ち上がってくる可能性があるのだとすれば、当

新刊案内

台湾造船公司の研究

植民地工業化と技術移転
(一九一九一七七)

洪 紹洋 著
八四〇〇円

日本統治時代の台湾船渠との
継承関係と戦後の技術移転の分析

中国内陸における農村変革と地域社会

山西省臨汾市近郊農村の変容

三谷 孝 編
六九三〇円

日中戦争以前から農民たちが
見つけてきた中央政治とは

◎法政大学大原社会問題研究叢書

農民運動指導者の戦中・戦後

杉山元治郎・平野力三と労農派

横関 至 著 農民運動労農派の実戦部隊指導部としての
八八二〇円

実態を解明

- 1 労農派と戦前・戦後農民運動
- 2 全農全会派の解体
- 3 大日本農民組合の結成と社会大衆党
- 4 旧全農全会派指導者の戦中・戦後
- 5 日本農民組合の再建と社会党・共産党
- 6 杉山元治郎の公職追放
- 7 三宅正の戦中・戦後
- 8 平野力三の戦中・戦後

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

然、その相互作用や発達のプロセスに
特異性があるということも疑ってみる
必要があると考えられるからである。

これは、無論、かつてのように、自閉
症の発生に「冷蔵庫のような母親」が
関わっているというような意味での環
境因説を再び持ち出そうとするもの
はさらさらない。養育者が冷淡な態
度をとって子どもに対して社会的鏡の
役割を果たさないというのではなく、む
しろ、社会的鏡としての養育者を子ど
もが利用しないがゆえの非定型性とい
う可能性もまた想定してみる価値があ
るということである。

実のところ、近年、自閉症の行動上
の初期徴候として在るのは、他者の視
線、顔、情動表出といった、いわゆる
社会的刺激への選好性の希薄さや定位
上の問題であるのではないかというこ
とが指摘されるに至っている（それは
先に述べた第一次間主観性の特異性と

も言い得よう）。そして、これを受け
て仮定すべきことは、そもそも、社会
的刺激的発信者たる養育者に注意を向
けようとしなければ、子どもはそこで
映し出しや照らし返し等の恩恵にも与
れなくなる可能性が高いということであ
る。現に、近年の自閉症論の中には、
こうした初期の親子関係の中での
社会的経験の不足が、その後、カスケ
ード的に（おそらくはミラー・ニュー
ロンの発達不全も含めた）自閉症の
種々の特徴を生み出していくというプ
ロセスを仮定するものが増えつつある
ようである。自閉症の発生基盤に、何
らかの遺伝的および脳神経学的特異性
が介在していることを否定することは
できない。だが、その内在的な非定型
性に着目する一方で、自閉症児を取り
巻く社会的環境が徐々に非定型的なも
のになっていくという時間的道筋があ
るということにも正当に目を向けなけ

ればならないのではないだろうか。ご
く自然に感応し合う関係性から種々の
発達は立ち上がってくる。しかし、そ
こにちょっととした失調や齟齬があ
ると、それは時に発達の方向性を次第に
大きく分岐させてしまうようなことも
あるのかも知れないのである。

（えんどう・としひこ）

東京大学大学院教育学研究科准教授